

事項	りんごの枝幹害虫ヒメボクトウのフルベンジアミド水和剤（フェニックスフロアブル） 散布によるふ化幼虫食入防止法		
ねらい	近年、りんごでは枝幹害虫のヒメボクトウによる被害が拡大傾向にあり、対策が急務となっている。ヒメボクトウのふ化幼虫に対するフルベンジアミド水和剤（フェニックスフロアブル）の食入防止効果を検討したところ、効果が確認されたので参考に供する。		
指導参考内容	<p>1 ヒメボクトウの生態の概要</p> <p>(1) 越冬 幼虫は枝幹内部で越冬する。幼虫期間が長く、羽化するまで2～3年を要するため、越冬時は発育段階や大きさの異なる幼虫が混在する。</p> <p>(2) 幼虫加害 幼虫は赤紫色～赤褐色を呈する。卵からふ化した幼虫は主幹部や主枝・亜主枝などの大枝に食入し、数十匹の集団で木質部を縦横に食害する。被害部位では虫糞や木屑の排出がみられ、独特の発酵臭がする。被害が著しくなると、樹勢が低下し、枯死に至る。</p> <p>(3) 成虫の発生時期 7月上旬から8月上旬頃に成虫が出現し、7月中下旬を盛期とした発生を示す。</p> <p>(4) 産卵 成虫は羽化後すぐに交尾し、粗皮の下や樹皮の割れ目などに数十～100卵以上の卵をまとめて産卵する。卵は25℃で、15日程度でふ化する。</p> <p>2 ヒメボクトウふ化幼虫の食入防止法 成虫の発生盛期で、ふ化幼虫が樹に食入する前の「7月半ば」に、フルベンジアミド水和剤（フェニックスフロアブル）4,000倍を枝幹部にかかるように散布すると、ふ化幼虫の枝幹内部への食入を防止することができる。</p>		
期待される効果	ヒメボクトウによる被害の軽減が図られ、安定生産につながる。		
利用上の注意事項	<p>1 本資料は平成27年1月21日現在の農薬登録内容に基づいて作成した。</p> <p>2 農薬を使用する場合は、必ず最新の「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)を確認すること。また、短期暴露評価導入により使用方法が変更された農薬は、登録内容の変更前であっても、変更後の使用方法で使用する。</p> <p>3 すでに枝幹内部に食入している幼虫に対する殺虫効果は期待できない。</p> <p>4 産卵場所を少なくし、薬液の付着を良くするために、春季に粗皮削りを行う。</p>		
問い合わせ先 (電話番号)	りんご研究所 病虫部 (0172-52-2331)	対象地域	県下全域
発表文献等	平成24～26年度 試験研究成績概要集（りんご）（りんご研究所）		

【根拠となった主要な試験結果】

表1 ヒメボクトウ幼虫に対するフェニックスフロアブルの食入防止効果 (平成24年 青森りんご研)

供試薬剤	区	平均糞乾物重 ×10 ⁻² g	1樹当たり平均生存幼虫数			薬害
			段ボール下	主幹内部	計	
フェニックス フロアブル 4,000倍	散布7日後接種 (8月22日散布)	1.1	0	0	0	—
	散布14日後接種 (8月15日散布)	1.7	0.6	0.2	0.8	—
	散布21日後接種 (8月8日散布)	1.7	0.4	0	0.4	—
無散布	—	37.9	0.2	10.8	11.0	

(注) ポット植え6年生「ふじ」/マルバカイドウを1区5樹供試。8月8日、15日、22日に薬剤散布。8月29日に段ボールを主幹部に巻き、その内側に幼虫を1樹当たり20個体接種した。9月28日(接種30日後)に段ボールを取り外し、排出された虫糞の乾物重、生存虫数を調査した。また、主幹を解体し、内部の生存幼虫を調査した。薬害は肉眼観察により調査した。

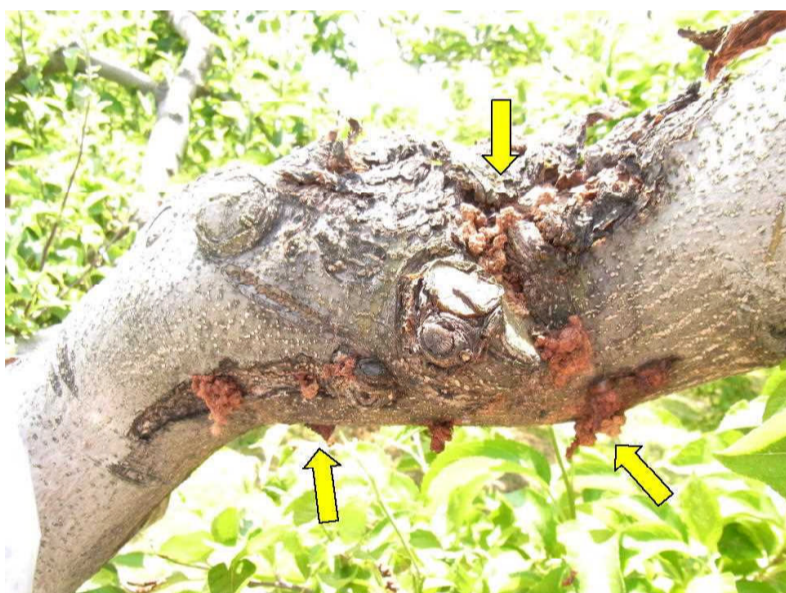


写真1 ヒメボクトウによる被害状況
(矢印は糞や木屑の排出)



写真2 ヒメボクトウの幼虫

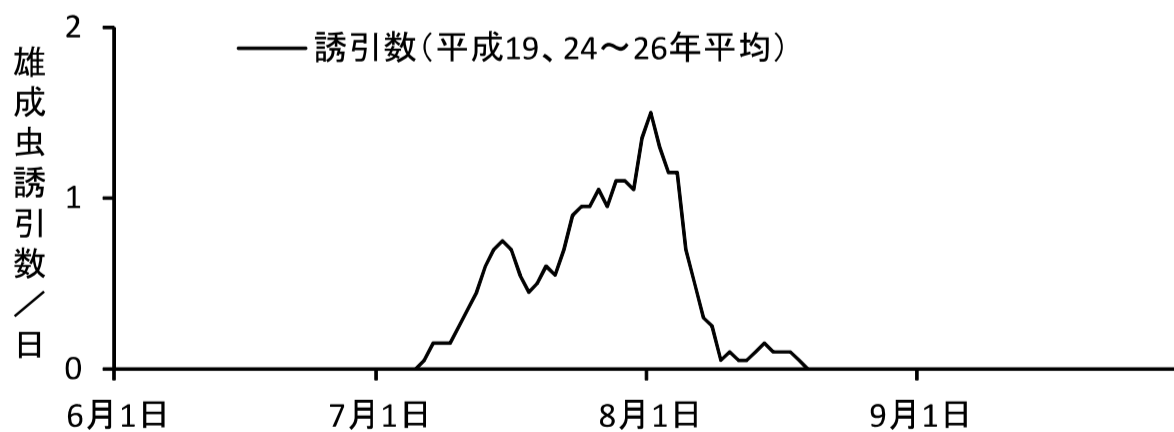


図1 フェロモントラップによるヒメボクトウ雄成虫の発生消長
(平成19、24～26年 青森りんご研)



写真3 ヒメボクトウ成虫
(翅を開いたときの大きさは40～60mm)

(参考価格) 4,000倍10a当たり5000散布で、1,815円(税別)